
旅する二人は

imayami

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旅する二人は

【Nコード】

N3227C

【作者名】

imayami

【あらすじ】

始まるは珍道中！旅するは高校生の少し思考が踏み外し気味な少年と、話の噛み合わない少女。行き先未定！意味なし、意義なし、目的なし！日本へ世界へ異世界へ！ 毎話三つのお題を設定して書いてます。

第一行：それは名も無き……（前書き）

節分には大豆を蒔く家庭と、落花生を蒔く家庭があります。

第一行：それは名も無き……

「地殻変動でも起きればいいのに……」

隣から聞こえてきた。

今のは多分 気のせいだ。そんなことになれば、死んでしまう。
『視覚変調で転ければいいのに』の聞き間違いだろうか？ いや、
それこそ意味が分からない。

「死にたい……」

隣から聞こえてきた。

ああ、これって無視していいよな？ いいよね？ 関わっちゃ駄
目だよな？

「なあ、殺して」

右頬を机にぴったりと張り付けてこちらを向いている。……ここ
ら を向いている。

「なんでだよ!？」

ああ、なんで俺は反応したんだ!？
思わず反応してしまった。本当に一生の不覚。仕方がない、仕様
がない。話だけでもしてあげよう。

「昨日落花生食べた」

「ああ。節分だったな」

「15個」

「お前って15歳だったか？」

初耳だ。俺達は高校二年。飛び級制度はいつの間に施工されたんだ。

「16だよ」

「そういえば俺数えてなかったな」

「一個足りなかった」

うん、素晴らしく綺麗だよ。スルーの切れ、とか色々。

「落花生か？」

「だからもう生きてる意味なんてないだ。この世の終わりがくればいい」

「落花生くらいなんだよ」

世の中嫌になることなんて満月のように満ちている。例えば、次の時間テストがあったり、前の時間寝てたら注意されたり、そしてまさに今俺の言葉が半分近くなかったことにされてたり。

あ、もしかすると俺の親がどこか行ってそのまま音信不通になり二年近く経つということもそこに並べてもいいかもしれない。

「赤ペン」

手が伸びてきた。貸せということか。残念ながら筆箱には赤ペンが入ってなかったので赤鉛筆を渡した。

すると彼女はそれを一心不乱に机につきたてる。

「私の心」

いや。いやいや　かなりまずいだろ。
真っ赤に塗られた机。酷い心象世界があつたものだ。

「大丈夫だ。相談ならのつてやるぞ？」

そう言った。言っただけだが。

「そう」

チャイムが鳴って授業が始まった。
さあ、テストの時間だ。
科目は地学。

第一行：それは名も無き……（後書き）

オチがありません。導入ですらありません。しかも旅に出てません。というかこれをシリーズにするつもりなかったんです……。ごめんなさい。第三行くらいで旅に出ます。

さてそんなこのシリーズは三題で書いていこうと思ってます。

今回は「地殻変動」「落花生」「赤ペン」でした。

次回は「地球儀」「だるまさんがころんだ」「マーマレード」です。

第二行：味気ない日々（前書き）

ヒロインに話に通じないのは仕様です。

第二行：味気ない日々

「地球儀って丸い」

丸くない地球儀ってあるのだろうか。あるとすればそれは不良品だ。返品すること奨める。

俺は目の前に出された水入りのコップを睨みながら思った。

「地球って丸いのねー」

なんでこんな話してるんだ？

思い出してみても、ここで会話をする理由は思い当たるが、こんな会話をする理由は見当たらないぞ。

待て待て、よく考えたらクラスの女子の家にいるってのもおかしい話じゃないか？ とすると『ここで会話する理由』すら危うくなってくる。

「なんか反応してよ」

どうしろと？

「明日のレク、だるまさんころんだってね」

やっとまともな話題だ。いや、というよりは既に“まとも”の基準が狂ってしまっている気もする。

「らしいね。でも高校に入っただるまさんころんだやるとは……」
「いいじゃん。楽しいと思うよ？」

果たしてそうだろうか。

俺にはクラスメート達 特に一部男子が、楽しそうにだるまさんがころんだをしている光景には生理的な忌避感を覚えるのだが。

「でもさ、他に選ぼうってものがあるじゃんか」

「南アメリカと北アメリカってよく繋がってるよね」

壮絶に無視された。

だから会話しようよ？ な？ 地球儀はもういいからさ。なんでそんなくるくる回し続けてるのさ。確か俺は悩み相談に呼び出された筈なんだがな？

しかし、まさか本当に相談されるとは思っていなかったが。

「あ、クラッカー食べる？」

答えも聞かずに棚から頭突っ込んでるし。水じゃなくてワインだったら良かったんだけどな。

「水とクラッカーじゃ果てしなく味気ないからいらない。それよりはやく本題に入らないか？」

ガサゴソと音が聞こえてくる けど、君は一体何をしていらっしやるので？

あー、なんかもう相談になりそうもないなあ……。

「マーマレードいる？」

そもそも相談する気あるのか？ 何を相談する気なのか知らないけど。

「じゃあ、貰うよ」

それならまだクラッカーに合うだろう。
もう、どうとでもなってくれ。

「クラッカーないけどね」

どうしてだ!?

第二行：味気ない日々（後書き）

今回の話は、まあ 察してください。だるまさんころんだを中心にもってくれば何とかなったのかな。

三題で書いているこのシリーズ。

今回は「地球儀」「だるまさんがころんだ」「マーマレード」でした。

次回は「風鈴」「入道雲」「おせち料理」です。

第三行：ここはどこ？（前書き）

節^{せち}は年に五回、1月7日、3月3日、5月5日、7月7日、9月9日、にあります。

詳しくはGoogleで何かで「節句」で調べるといいかも。

第三行…ここはどこ？

暑いなあ……。暑いよなあ。

俺の住む札幌は冬なのに、なんでこんな暑いんだろ。まだ三月の三日。暑すぎやしないか？

これは八月後半の暑さに匹敵する。計算上そうなる。

「いやー、晴れた晴れた！」

晴れたな。確かに晴れたさ。しかしその一体どこにそれほどまで喜ぶ要素が隠れ潜んでるんだよ。それに　なんでそんな平気な顔でいるんだよ！　絶対猛暑日だぞ。ほら例の新しく設定された猛暑日！　こんなところにいたらそんな言葉に意味はないけどさあ。

ってよく考えりゃ、こいつはこれを予想して半袖&スカートだったわけだ。そりゃ涼しいわな。事前に知らせてくれればいいものを……？　いや連絡されてたら逃げたかもしれないな。

どっちにしても、こちらら長袖長ズボンだ。

だから俺としてはむしろ曇ってくれた方が良かった。否、過去形ではなく現在形で、今からでいい

曇れ！

あつついんだよ。俺は寒い方が好きなんだよ。以前こいつに拉致られて流水見に行ったときは暑いほうが好きだといっていた気もするがあれは気の迷いだ。

「良かったな」

皮肉っぽく言ったが多分向こうは気付いてない。鈍感なのか厚顔なのか　十中八九両方。

つかどうしてこんなところにいるんだ、俺。いや、おおまかには

分かってるんだ。あくまでぼんやりと。

そう　理解はしてるんだよ。でも、理解と納得は違うんだなこれだ。

どうして俺を連れてくるの？　ねえ？

「入道雲」

空を指差している女の子一名。いつもどおり脈絡なし。

話には流れなんて存在しません。あるのは言葉だけです　みた
いな。そんな考えでもあるんだろうか。

「本当だな。あれが空にまんべんなく広がってくれりゃいいのに」
「え？」

うん？

晴れを心底喜ぶ少女から『今なんて言ったの？』と、そんな感じの瞳で見つめられる。

さて俺は今何をくちばしたのだったか。忘れよう。それがお互いにとって幸せだ。

「そついや、なんで風鈴があるんだ？」

まだ三月だぞ。いくら暑くても今が三月だという事実は忘れてくれない脳みそさん。ありがとう、感謝を評します。あなたが我が最後の砦。

「夏じゃん。持参した」

いや、夏ではあるんだが……………。
何と言いますか、場所柄と目の前に広げられた料理に難があると

言うか……。

「夏だな。でもさおせち料理あるぞ？」

「今日は節句　　節^{せち}じゃん。やっぱり必須だよ」

実は節^{せち}なんてものの存在は今日初めて知ったん日本人です、俺。
年に五回もおせち料理を食べる日があったとはね。でも　それ
もやっぱり場所柄が悪いというか。

「そうだな。じゃあ、なんでオーストラリアまで来るんだよ？」

俺はまったくどうして南半球なんかにいるんだか。おかげさまで
季節感狂いまくり。

それにオーストラリアのこんな無味乾燥なところでおせちと風鈴
が……。季節感どころか常識まで狂い始めている。
風鈴のちりんちりんという音色が果てしなく虚しいよ。

「だから私の知り合いが　　」

それも聞いたよ。知り合いがオーストラリアにいて遊びに来たん
だろ？

はあ。なんでこんなことに……。

三週間ほど前に網走に連れて行かれたのはまだ　　まだいい。あ
の時はただ列車に揺られているだけでおかしなことは一つしかなか
ったからな。

だが今回は謎が多い。

どうしてお前が俺のパスポートを作って持ってるんだよ。しかも
飛行機のチケットとかもファーストクラス……。ナニモンだあんた
という疑問には未だ答えを貰っていない。

もしかして一生答えなんか分からないのかもしれないかもしれなかった。

第三行：ここはどこ？（後書き）

なんか、時系列が滅茶苦茶になる気がしてきましたが、大勢に影響はありません。各話完結でいくつもりですので。

今回のお題は「風鈴」「入道雲」「おせち料理」でした。
次回のお題は「クリオネ」「かき氷」「ラブレター」です。

第四行：ラブレター（前書き）

網走での流氷の接岸初日（視界に氷が見えた最初の日）は一月ころ。
接岸初日（沿岸水路がなくなり船舶が航行できなくなった最初の日）
は大体一月終わってから二月初めくらい。

流氷終日（視界に氷が見えた最後の日）は三月終わってから四月初め
くらい。

という感じみたいです。なんかコラムと化して来た前書きでした。

第四行：ラブレター

「息が真っ白」

まあ、それは、息も白くなるだろう。それはここでもなくとも同じこと。

だが俺は寒いのは嫌いだ。なぜこの寒い季節にわざわざ更に寒いところ　札幌から網走に來なければならぬのかと愚考する。

結論としては俺の意思など遠く及ばない思考の持ち主のせいだ。まあ、それはいい。今更氣にしたところでどうしようもない。

「はやくクリオネ見に行こう？」

はやくも一段飛ばしに会話を進めるやつがいる。

「別にいいよ、見なくて。それよりはやく暖かいところ行きたいな」

「駄目だよ。今回の目的はクリオネなんだから」

……聞いてない。

「で、どこだ？」

文句を言っても無駄そうだな。ならばとつと用を終えて帰ろう。これは締観ではなくきつと順応だ。

そう　自分に言い聞かせる。

「水族館」

ほほお。水族館とな。

英語でアクアリウム。独語でアクヴァーリウム。

残念ながら水族館に行く、というのではわざわざ流水が見えると
こまで来なければならぬ理由は分からない。

聞くは一時の恥、知らぬは一生の恥　どっちを選んだとしても
恥でもなんでもないはずなので聞いてみると、意外にも答えを得る
ことができた。

「流水欲しかったから」

ああ。

なるほど納得だ。

流水欲しかったのか。だったらこういうところに来ないとな。
うん。なるほどな。うん……。

「なんでだよ」

俺には根本のところがわかっていない気がする。

「本場の氷でかき氷を食べたいから」

本場なのか。全く知らなかった。

つてか本当に本場か？　適当に答えてないか？

「ねえねえ」

「なんだ？」

もう何が起きてても動揺しないぞ。

「ラブレター拾った」

「……………」

「……？」

「なんでだよ！？ 意味わかんねえよ！ 一体全体どうしたらそうなる！」

……………ふう。

「以上心の叫びだ。では気を取り直して
うるさいよ」

うつわ。絶対零度な視線。
声に感情がないのはいつものこと。

「御免」

「説明していい？」

「お願いします」

俺の口調、なぜか敬語になってるよ？

「了解。まず、前を人が歩いてたの」
「なるほど」

別に驚くことではない。

結果としてそうなることはよくある。

目的が人の後を歩くことになれば犯罪だが。

「そしてその人が手紙を落としたの」
「ははあ」

それがラブレターだったわけだな。

「で、私はそれを拾って」
「うんうん」

渡してあげようと……まあ、何割かの人は思うだろう。

「親切にも届けてあげようと思って、手紙を見たけど差出人も受取人もわからなかったから、」
「うん？」

「いやいや、今おかしな点が見受けられたぞ。聞き受ける、か？
違うな。そんな言葉ない。」

「開けてみたら、ラブレターだったの。驚きだね」
「わざとだよな？ そうだよな？」

分かってやってるなら俺は、……俺は？
思えば別に、『お前を許さない』って言う理由もないな。

「何が？」

「だーからー、どうして落とした人にそのまま渡さないんだ！」

「あっ！ その手が。じゃ今から渡してくる」

「待て待て待て」

「何？」

「開封したラブレター渡すのはまずいだろ」

いろいろとその後の展開とか会話とか。

「そっか。じゃ捨てる」

彼女はそう言ってなんの躊躇いもなく雪の上に放る。

「……………」

ま、これでいいか。

「じゃあ水族館か？」

「うん」

第四行：ラブレター（後書き）

すいません。ラブレターは主人公たちとはかわりのないものでした。期待してた方はいないと思いますがいた場合は……。

ということで今回は「クリオネ」「かき氷」「ラブレター」でした。次回は「通り魔的犯行」「イモータル」「結婚相談所」です。

ますます意味が分からなくなりそうです……。。

第五行：唐突な出来事（前書き）

豆知識。なんで“豆”にしたんでしょうか……。英語だと「知識の断片」とかそんな感じになるみたいですが。というか豆知識って単語が広辞苑にも大辞泉にも載っていないという事実。

第五行：唐突な出来事

病院か。

こうやって病院に来るなんていつ以来だろうか。思い出せないほど昔なのか、それ以前に思い出せる過去がないのか、とても新鮮な感じがする。もっとも、これを新鮮と思えなくなるのがいいことだとは一欠片も思わないが
それにしてもなんでこうなるのかな？

「ねえねえ。包帯だらけ」

彼女が自分の体に巻かれた包帯を見せてきた。

「見ればわかるさ」

と答えたが果たしてその言葉に意味があるだろうか。見ればわかるのは当たり前だし。

「通り魔的犯行だったさ」

あ。久しぶりにスルーされた。

どうしてこんなことで感慨に浸ってるんだろ。自分に疑問を覚える。

「らしいな。運が悪い。むしろ運が良い。こんな体験またできるかわからんぞ」

それにしたってどうして旅行に来てまで、通り魔に襲われてるんだ、こいつは。

「リング剥いて」

「今の話聞いてたか？　ひとがせっかく」

「やっぱり梨がいい」

何も聞く気がないのか、何も聞こえてないのか。どっちなのかなんてあまり分かりたくないな。

「……はいはい」

ポケットからツールナイフを出す。

「面倒だから皮そのままでもいいよな？」

「ダメ」

そんなにすぐ否定しないでも。

「ところでな、犯人は結婚相談所からの帰りだったらしいぞ」

「イモータル！」

「はあ？」

いきなり何を言うか。いや、むしろそれはいつもか。

あー、皮千切れた。せつかくここまで繋がってたのに。やっぱりこんな栓抜きまでついているツールナイフを使っていたからだろうか。

「私は不死身だから気にしないでいいんだよ」

「なんの話だ」

「私が刺されたことだよ」

「どうして俺がそれを気にするんだ？」

「気にしてないの」

「さあ。どうだか」

「冷血漢」

「酷いな。一応助けたんだがな」

「でしゃばり」

「なんか違うだろ」

「悪魔」

今までで一番悪いな。だけどそんなんじゃめげないぜ。

……………
一体何にめげるつもりだ。

「ほい。梨」

皮だけ剥いて、切り分けてない梨を丸々一つ渡した。

第五行：唐突な出来事（後書き）

……いや、なんと言いますかね、これ以上どうにもなりません。筋の通った小説をここで書くつもりはあまりないので……。

そんなこんなで今回は「通り魔的犯行」「イモータル」「結婚相談所」でした。

次回は「バージンロード」「光化学スモッグ」「東インド会社」……です。

なんというか……誰かまともなお題をください……。

第六行：疑問（前書き）

バージンロードは日本語です。英語では”aisle”です。

第六行：疑問

「ところでバージンロード」

「うん？」

「……………」

いや……。

黙らないでよ。

会話の途中ですよ。少なくとも俺はそうだと思っていますよ。

「主語だけじゃわからないよ」

「だから、光化学スモッグが酷いなあって」

絶対違うだろ。

まあ、その奇奇怪怪な言動にもそろそろ慣れた。そのうち突っ込みも忘れてしまいそうだ。つまるところ人間としての機能が徐々に失われているのである。主に脳が日常生活において外界への興味ないしは関心を失いつつあるのだ。

いやいや、言っていて意味が分からないぞ。そもそも大脳ってそういう機能持っていたのだから。

「そりゃメキシコシティって言ったら光化学スモッグだよ」

「日本語なんだね」

おい、今どこに対するコメントをした？ 俺の記憶と認識が確かならずって日本語の会話だったと思うのだが。

「そうそう。怪我全治したよ」

知ってるよ。それを今頃言うのか。

飛行機に乗ってた数時間とか、外出もせずにトランプに興じていた数十時間とか、今までに何度機会があったことか。

「それでね、お祝いにどこか行こうと思うの」

「今ここにいるのはどうしてだ？」

もう既にメキシコなんていう地の果てまで来てるのだが？

「リハビリって言うらしいの」

なるほどな！。

言葉って便利だな。意味がわからなくても成り立つもんな。

「問題！ 1600年に起きた事件を答えよ」

……やっぱり慣れないよな。

どこから湧いてくるのか、この唐突さ。

俺もびっくりである。

「イギリス東インド会社設立だな」

「そこは普通関ヶ原の戦いって答えるよ」

ああ。まさかこいつに普通を諭されるとは。

世も末……世も末？ なんか違う気がするな。論点が違うとか視点が違うとか、基点が違うとか……、自分は一体何を考えているのだろうか、とか。

ってかここ二週間でいろいろ旅行してるよな。……ん？ 待て待て。どうしてだ？ 確か俺はこいつの悩み相談をするつもりだったんだが。いや、それすら怪しくないか？

「まあ、いつか」

「何か言った？」

おっと、考えを口に出すとはなんとも愚かな。

「なんでもないよ」

「あ、次はエジプトに行くよ」

暑いのは嫌いなんだがな。

しかも『行こう』や『行く？』ではなく、既に決定事項として扱われていることには何か反論しておくべきだろうか。

第六行：疑問（後書き）

ああ、もうどうにもなりませんね。

今回は「バージンロード」「光化学スモッグ」「東インド会社」でした。

次回、「暖炉」「ココアパウダー」「労働基準法」です。楽しみに。

第七行：凍てつく大地（前書き）

労働基準法によって定められているのは「賃金、就業時間、休息その他の勤労条件に関する基準」だそうです。

第七行：凍てつく大地

暖炉で薪がパチパチとはぜる。はぜながら刻々とその色を白化させていく。

窓の外に見えるは雲ひとつない闇色。ひどく寒々しい、針葉樹の森。

ここで少し待つて欲しい。

.....。

やっぱりもう待たなくていいや。待ったところでなにひとつ変わらないのは明々白々だ。

理解した。

ここはロシアだ。

昨日エジプトへ行くと言われていたのだが、この際気にしない。どこだろうとなんら変わらない。日本ではないというだけで十分過ぎる。だから 気に、しない。

「いやいや、気にするだろ」

独り呟いた。なんだろう、少し虚しい。

出発するまで、否、ここに到着するまで俺はエジプトへ行くつもりだった。つまりは三時間前まで。

いつもチケットは直前に渡される。しかも特に考えもせずに乗ってしまうのだ。なんかずいぶんと緑だなあ、エジプトの方って意外と森あるんだな、とか思っていたら、

なぜかロシアに着いた。

どうでもいいけど 何もかもがどうでもいいけど今は寒くて仕方がない。熱源は見ているだけならほのぼのする暖炉だ。が、暖炉しかないのはなぜだ。というかなぜ暖炉がある？

「ココア飲む？」

俺をここに連れてきた張本人の登場だ。実はさっきからずっといる。寒くないのだろうか。椅子に座って読書中である。

「飲む。凍え死ぬ」

しばらくして彼女がココアを手に戻ってきた。それを受け取り一口飲む。

火傷した。

「ココアパウダーの賞味期限切れてた」

そういうことは飲む前に言って欲しかった。

いやいや。どうせ飲んだら言うから言わないで欲しかった。何か言おうかとも思ったが今日は寒くて話す気力が出ない。

暖炉の真ん前に座ってココアをすする。

暖炉からの音に眠気を誘われる。

……。

……。

……。

「ん？」

寝ていたらしい。振り返ると彼女が椅子の上で毛布を被って寝ていた。椅子の手摺にはココアが入っていたカップがのっている。椅子のわきに本が転がっている。

『労働基準法』

一体何がしくてこんな本を読む？

謎だ。それにこんなに頻繁に海外に出掛けて金がなくならないのも謎だ。俺が引っ張り回されるのも謎だ。

「あー、そうか」

彼女はきつと会社を経営してるんだ。なるほどなるほど。だから労働基本法か。納得だ。

うむ。意味がわからねー。大分脳が停滞している。

また寒くなってきた。

薪を二、三本暖炉に突っ込んだ。

しばらくそれを眺めた。

今更のように時計を見ると二時だった。午前二時。確か丑三時か？後ろの彼女は眠ったまま。

こうやって見ると、とても絵になる。

暖炉の前。

椅子に座る少女。

毛布を被り眠る。

手元にココア。

近くには本。

まるで

そう、

まるで、凍え死んでいるようにみえる俺の思考回路は一体なんだろう。

第七行：凍てつく大地（後書き）

なんとなくそれなりのペースで更新しています子のシリーズ。まあ、細かいところにも大きなところにも突っ込まないでください。そんな感じで今回は「暖炉」「ココアパウダー」「労働基本法」でした。

今回は「アッサム茶」「十和田湖」「エンドロール」です。多分滅茶苦茶になります。それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3227c/>

旅する二人は

2010年10月9日22時10分発行